

学外特設キャンパスでの学び ～地域連携と教育効果～

報告者

井上 芳恵（龍谷大学 政策学部 准教授）

松島 三兒（長浜バイオ大学 バイオサイエンス学部 教授）

小島富佐江（NPO法人京町家再生研究会 理事長）

コーディネーター

山本 淳子（京都学園大学 人文学部 教授）

参加人数

34名

大学教育におけるアクティブラーニングの重要性が叫ばれる今、学外に設置した特設キャンパスを拠点とする活動が、全国各地で試みられている。学生はそこで地域とふれあい、課題を発見しつつ解決にとりくむPBL（課題解決学習）を体験できる。また地域も、学生がもたらす活気や新しい試みを刺激とし、活性化が可能となる。特に、地域には町家や古民家など独自の多彩な伝統的建造物があり、それを利活用した特設キャンパスは、伝統の継承という意味で教育的効果も地域活性効果も高い。ただ一方では、学外特設キャンパスの利活用方法に行き詰り、活動を縮小するケースも起きている。学外特設キャンパスにはどのような難しさがあるのか。どうすればそれを突破して、学生と地域の双方がよりよい実りを得ることができるのか。現在活発に活動中の三つの町家キャンパスの関係者に登壇頂き、大学生自身の声も交えつつ、町家活用PBLの事例と将来性について考えたい。

〈第 13 分科会〉

学外特設キャンパスでの学び ～地域連携と教育効果～

総括報告

1. 進行表

- 10:00～:20 開会挨拶・趣旨説明「学外特設キャンパスの可能性と課題」（コーディネーター）
- 10:20～:50 第一報告「龍谷大学深草町家キャンパスの開設経緯と活動内容」（井上芳恵氏）
- 10:50～11:20 第二報告「長浜バイオ大学における町家キャンパスの活用の状況」（松島三兒氏）
- 11:20～:50 第三報告「学外特設キャンパスでの学び～地域連携と教育効果～」（小島富佐江氏）
- 13:30～14:10 学生プレゼンテーション（長浜バイオ大学・龍谷大学）
- 14:10～:40 全体ディスカッション 質問・コメント票への回答とフリートークセッション
- 14:40～15:25 グループディスカッション（8名1グループ+補助学生）
サマリーシートへの記入、グループ間のアイデア・意見の発表・交換
総括コメント（コーディネーター）
- 15:25～:30 閉会挨拶（コーディネーター）

2. 概要

2-1 分科会のねらい

本分科会では「学外特設キャンパスでの学び～地域連携と教育効果～」をテーマに、地域の持つ伝統的建造物を大学教育の現場として、地域とwin-winの関係で活用するための方法と課題を考えた。そのため、登壇者は現在活発に活動中である三件の「町家キャンパス」より、大学の担当者二名、町家の大家で町家の保存に関するNPOの代表である一名に依頼し、多角的な議論を目指した。また二大学から実際に町家キャンパスの活動に参加中の学生六名が参加し大学ごとに発表を行

うことで、学生の立場からの視点を加えるとともに、彼らを教育効果の実例として参加者に紹介した。さらに学生たちをグループディスカッションの補助要員として配置することで、参加者が学生と直接交流し討議する機会を設け、生きた形での教育効果や課題が発見・確認されることを目指した。

2-2 各プログラムの概要

①開会挨拶・趣旨説明（コーディネーター）

まず資料集分科会頁扉に示した梗概を読み上げた後、現在コーディネーターの直面する問題として、京都学園大学京町家キャンパス（15年度までの名称）の事例を、オープンキャンパス用の京町家キャンパス紹介PPを示しつつ小報告した。同施設は現在順調に活動中だが、大学の改組によるカリキュラム変更のため、近い将来使用方法を改革することが必要となり、より効果的な活用法を模索中である。したがってコーディネーターは当事者として本分科会から問題解決の糸口を得ることを期待しつつ分科会運営を行う旨、説明した。

②第一報告 龍谷大学深草町家キャンパスの開設経緯と活動概要 井上芳恵氏

井上氏は都市計画・町づくりを専門分野とし、文科省現代GP（現COC）等において大学教育と地域連携のプロジェクトに従事した経験をもつ。まず専門家としての見地から、諸大学によるまちなかキャンパスの事例とその背景、大学による町家利活用の事例が紹介され、ついで龍谷大学深草



町家キャンパスの活動が報告された。

同町家キャンパスは、その開設に先立ち、運営・管理、地域情報の集約や地域と学生の協働による地域活性化事業の推進を目的に「NPO 法人深草・龍谷町家コミュニティ」を設立し、龍谷大学教職員と地域住民をその構成員とした。また、各学部の学生有志による「京まちや七彩(なないろ)コミュニティ」が組織され、町家キャンパスにおける事業の一部を企画・運営している。このように学外特設キャンパスにとっては、第一に大学と地域の連携のしくみ、第二に学部学年を超えた学生の継続的な参加を図るしくみという二つのしくみづくりが有効であり、その上に諸活動が安定的に実施されることが理解できた。

活発な諸活動の内容が紹介され、まとめとして町家キャンパスの効果と課題も具体的に提示された。特に課題としては、初動の事業期間を超えても利活用を継続させるために、実績をPRする必要が強調された。

③第二報告 長浜バイオ大学における町家キャンパスの活用の状況 松島三兒氏

松島氏からは、氏がキャリア教育を担当する中で始めた授業「長浜まちづくり魅力発見プロジェクト」が、大学側の「地域に開かれた大学」という目標と地域側の大学に対する「地域の産業を担う人材育成・指導」という期待の合致点となり、地域連携の端緒を開いたと説明された。このことから、特に「まちづくり」を専門に学ぶ学生に限らず、地域は将来の人材として学生との交流を期待していることが知られた。また同大学の町家キャンパスは、市中心部に学生の拠点を設け地域連携の継続性を確保するための装置として設置を見た。このことから、授業と町家とが、学生を地域貢献に向かわせるしかけとしくみとして有効であったことが理解できた。学生たちが地域活動に参加を始めた結果、授業はより学生の主体性をひきだすPBL授業「長浜魅力づくりプロジェクト」へと発

展し、他にも様々な活動が展開されることになった。このことから、学外特設キャンパスという装置に教育効果を発揮させる鍵は学生の主体性にあることが分かった。

松島氏からは、PBLの教育効果として、学生と地域との交流の深化、上級生から下級生への支援の醸成、就職活動への効果も挙げられた。

④第三報告 学外特設キャンパスでの学び～地域連携と教育効果～ 小島富佐江氏

小島氏は、京都市中京区に築100年を超え京都を代表する格の町家を所有し、居住するとともにその一部を京都学園大学京町家キャンパス(15年度までの名称)に貸す大家であり、また京都の町家全体について保存と再生を図る「京町家再生研究会」の理事としても活動している。小島氏からは京町家の定義、現状としての軒数、多彩な利活用法、その中におけるキャンパスとしての使用法が説明され、町家全体の状況が理解できた。

その上で、日本的な生活様式が日常から姿を消しつつある今、伝統的建造物の保存と利活用はとくに有意義であり、そこでは人間中心の利便性を重視した思考から建物に合わせ不便を文化とする思考への転換が促されることが指摘された。実際に京町家等伝統的建造物を自宅とする居住者でなくては思い至ることのできない示唆的内容であった。

また、特に大学キャンパスとして利活用することについて、大学が学生を抱え込むのではなく、地域と関係性を持ちつつ教育することに「ふれあいと学び」という効果が期待できることが述べられた。さらに、暮らしのかたち、生活のなかで五感を使うこと、自身の体を信じることといった「日常生活からの教育」が、学校での学び以外にも重要であることに触れ、伝統的建造物は地域の個性・特性を反映しているため、それを利用した学びは学生に「身体感覚」として地域の個性を理解させることになり有意義であると指摘された。現在、高等教育ではPBLなどアクティブラーニングが重要視され、そこではコミュニケーション力を含めた身体能力が基本となる。伝統的建造物は学生の身体を自然に教育する装置と成り得ると認識できる内容であった。

⑤学生プレゼンテーション1

「長浜バイオ大学の学生による町家キャンパスを活用した活動」

長浜バイオ大学地域活動団体 Entrance to Science と参加型脱出ゲーム 小浪海峰氏
サイエンスカフェ 原口大生氏



町家プロジェクト 東田拓也・山口悠理氏

長浜バイオ大学の学生四名により、活動の趣旨と内容が以下のように紹介された。

「Entrance to Science」は中学生以上の地域住民を対象に、町家キャンパスで科学についての講義と実験を行うもので、サイエンスコミュニケーションを目的とする。「参加型脱出ゲーム」は授業「長浜まちづくりプロジェクト」のアイデアで実現した、長浜を舞台にしたストーリー性のある体感型エンターテインメントで、34組84名の参加があった。授業をきっかけに町の人と相談を重ね、町家キャンパスの存在を発信できた。「サイエンスカフェ」は大学発の科学研究の先端的成果などを町家キャンパスにおいて一般市民に分かりやすい形で発表するもの。学内で研究プロジェクトを担当する学生・院生がプロジェクトごとに実施しており、合成生物学の国際大会で賞を獲得した成果を発表したものもある。「町家プロジェクト」は地域活動を実践する授業で、自分たちがイベントを企画、開催する内部型と、町のイベントに参加する外部型とがある。内部型では七夕イベントなどを実施した。また外部型では滋賀県ものづくりフェアにもものづくり体験と科学実験で参加したほか、地元インターネット放送局と連携して活動している。町家キャンパスは自分たちにとってのホームであり、地域活動を深めるツールである。

⑥学生プレゼンテーション2

「学外特設キャンパスでの学び～地域連携と教育効果～学生活動報告」

龍谷大学活動グループ 京まちや七彩コミュニティ 谷口優大朗氏、船越大暉氏

龍谷大学の学生二名により、活動の趣旨と内容が以下のように報告された。

「京まちや七彩コミュニティ」は龍谷大学の地域連携拠点である深草町家キャンパスに学生スタッフを募り、企画運営委員として組織化した団体。ビジョン・ミッション・行動指針を掲げて活動している。深草町家キャンパスは大学と地域との関係性を変え、多様な主体がアクセス可能なプラットフォームとなる。また、社会には公（組織）と私（個人）と「共」（ネットワーク）の三領域が必要であり、同施設は共領域を再構築することが可能である。こうした認識を土台とし、「まちやこうえん計画」を立ち上げ、「コミュニティガーデン」と「モノづくり教室」を二つの柱として、町家キャンパスに自然発生的に人が集う「居場所づくり」事業を進めている。また「町子屋」という自主ゼミ活動を行っているが、これは町家のスタッフを

務める学生の質を向上させるSDの取り組みである。町家活動を通して学生が自己を知り、さらに自己を発信することを目標として、自己分析・ディスカッション・ビブリオバトル等を行っている。

⑦全体ディスカッション・質疑応答

午前の部で寄せられた質問を質問対象の登壇者毎に分け、登壇者が質問を選択して回答を行った。また、それに対するフロアと登壇者の質疑応答を行った。

松島氏への問：授業「長浜魅力づくりプロジェクト」の詳細は。

回答：まちなかに地域の人々を呼び込めるイベントを、商店街と協力して企画・実施。隔週実施で一回2時間分、1単位。地域の人たちとの関わりをいかに増やすかが課題。評価は成果とプロセスの両面から行っている。

小島氏への問：今後は新しい文化をどのように創っていくのか。

回答：第二次大戦後の急激な生活様式の変化により、京町家の進化は一旦止まった状態であるが、「丁寧」など日本人の継承してきた文化の根本は変わらず継承されて行くと考え。現在日本文化が再評価されつつあり、新しい折衷文化は今後形成されて行くのでは。

井上氏への問：費用面の問題は。

回答：学外特設キャンパスで最大の問題。大学は大家さんへの賃貸料とNPOへの委託料（常駐スタッフ人件費等）を負担している。費用対効果が求められるが、稼働率等の数値的エビデンスのみならず、学生への教育効果、地域からの評価等の非数値的要素も重要である。

全員への問：参加学生を集める秘策、継続して参加させる秘策は。

回答：学生全体への施設の周知→入学当初に特設キャンパスを紹介する。

授業履修の場合→勧誘には既修生からの口コミが有効。既修生が次年度の授業にも参加し支援する。

学生団体の場合→サークルとして先輩学生が新歓を行い、後輩を募集し指導。

学生の回答 先輩の指導があると強い安心感が生まれることを体験した。

フロアから学生への問：活動前の印象、活動中に感じた困難、現在感じる成果は。

回答：軽い気持ちで始めたが、自分の考えだけでは進まない実感。リーダーとしても苦勞

したが、自分の強みや弱みが把握できた。
結果、不思議と道で話しかけられるようになった。自分の表情が変わったのだと思う。
(会場 声)

その他の問：今後同様の学外特設キャンパスを設置する大学へのアドバイスを。

回答：青年会議所等地域の団体と学生をつなぐ試みは有効。暗さ・不便さも含め町家での学びにこだわりを持つこと。学内合意が重要。町家に関わるチャンネルを全学的に増やすこと。また、伝統的建造物はメディア訴求力を持つので広報材料に活用可能である。

⑧グループディスカッション

座席により8人ずつの5グループに分かれ、学生たちが一人ずつ補助として入り、討議後に順次討議内容を発表。実質35分と短時間であったため自己紹介と感想の交換が主となった。発表では、学生たちの成長を目の当たりにした驚きの声が相次いだ。

3. 総括

本分科会では、伝統的建造物による学外特設キャンパスが教育効果を持つことが証明されたと考える。一つは地域との顔の見える連携、一つは学生の主体的な学び、一つは文化の継承、という点においてである。学生たちのプレゼンテーションはこの三点を実証し、分科会を楽しく有意義なものとしてくれた。そのことから、いかに学生の主体性を引き出すかが肝要だと痛感された。いっぽう課題については、費用対効果、学内合意、継続性が、どの学外特設キャンパスにも共通する普遍的な課題であるということが共有された。

こうした教育効果を持つ建造物は、一大学ではなく大学間で連携して活用する方法もある。京都ならば大学コンソーシアム京都が町家所有者にキャンパス登録を募り、規模や場所等の条件に随い授業を割り振って実施する方法が可能であろう。今後は是非実施していただきたいアイデアとして提案する。

ご協力下さった登壇者、参加学生、参加者に心より感謝申し上げます。なお、学生プレゼンテーション資料を、頁数に限りがあるため文字資料を中心に一部のみ抜粋して添付する。

「長浜バイオ大学の学生による町家キャンパスを活用した活動」

長浜バイオ大学の学生による
町家キャンパスを活用した活動

長浜バイオ大学 地域活動団体

Entrance to Science 小浪 海峰
サイエンスカフェ 原口 大生
町家プロジェクト 東田 拓也、山口 悠理

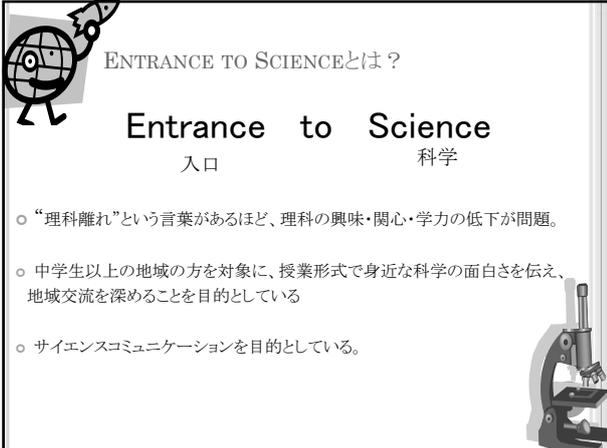
発表の流れ

- Entrance to Science
- 参加型脱出ゲーム
- サイエンスカフェ
- 町家プロジェクト

ENTRANCE TO SCIENCEとは？

Entrance to Science
入口 科学

- “理科離れ”という言葉があるほど、理科の興味・関心・学力の低下が問題。
- 中学生以上の地域の方を対象に、授業形式で身近な科学の面白さを伝え、地域交流を深めることを目的としている
- サイエンスコミュニケーションを目的としている。



活動内容

- 色の講義：毎回、色にちなんだ科学の講義と実験を町家キャンパスで開催。



紫色の講義

- 1 限目：カシスの不思議
- 2 限目：トリカブトを知ろう！
- 3 限目：ぶどうワイン

日程： 2/27 (土)・2/28 (日)
時間： 13:30～15:00
場所： 町家キャンパス
Mail: entrance.science@gmail.com
Facebook: https://www.facebook.com/entrance.science

参加費無料！事前申し込み不要！

- 「参加型脱出ゲームを企画・立案し、長浜の中心市街地に人を呼び込む。」

参加型脱出ゲームとは…
→ある場所に閉じ込められた参加者が時間内にヒントや暗号をもとに謎を解くことで脱出成功となる、体験型エンターテインメント。



なぜ、町家キャンパスを拠点にしたのか？

- 町家キャンパスで授業を行っていたからこそ、街の人に気軽に相談に行けたこと。
- イベントを通して、町家キャンパスの存在を参加者に知ってもらえたかった。
- 町家キャンパスが学生と街の人をつないでいた。



長浜バイオ大学の学生主催!

n+Bio
Science teams

サイエンスカフェ

11/29 (日) 10:30~16:00 参加費・入場料なし

第1回演説 10:30~11:30 第2回演説 14:00~15:00
(15:00~16:00 NEM Nagahama 展示コーナー)
両演説とも同席

長浜バイオ大学町家キャンパス
(滋賀県長浜市元浜町7番5号)

科学について聞いてみよう!
～科学の発展・世界で最先端な研究をされている研究者の講演～
～長浜バイオ大学で実際に研究している学生との対話～

主催するイベントです。お楽しみにしてください。大学でやっている研究
気になる方はぜひ参加してみてください!

内容

- ・CELL 第一・最近のバイオを使った DNA 抽出実験・講義
(浜名大も科学体験を開催することがあります。)
- ・NEM Nagahama - 展示コーナー開催したプロジェクト紹介・活動報告
(長浜バイオ大学の研究内容や最先端な研究について詳しくご紹介します。)
- ・長浜バイオ大学 - コーヒー・紅茶の提供 (無料)
(学内の自販機・紅茶の自動販売機。)



町家プロジェクトの活動内容

- 様々なイベントに参加・協力して、地域を盛り上げる
→ 外部型
- 自分たちでイベントを企画し、開催する
→ 内部型

内部型の活動について

町家キャンパスを使って、自分たちでオリジナル
ティーのあるイベントを企画・開催し、地域交流を
深めるとともに町家や団体のことを知ってもらう

- 今年度行ったイベント
7月 「七夕イベント」
12月 「クリスマスリース作り体験」

外部型の活動について

主に長浜にある様々なイベントに参加・協力
し、地域交流を深めるとともに学生のパワーで地
域を盛り上げる

- 主な活動内容
科学実験、ワークショップ(ものづくり体験)など

その他・・・防犯パトロール、STUDIOこほくなど

町家キャンパスの存在と活動の今後

- 私たちにとって、町家キャンパスとは?
→ 自分たちのホームであり、地域活動を深める一つのツール
- 活動の今後
外部型 → 様々なイベントに参加・協力し、より地域交流を深め、
学生のパワーで地域を盛り上げる
- 内部型 → 町家キャンパスを使って、様々なイベントを開催し、
地域交流を深めるとともに町家や団体、大学のことを
知ってもらい興味を持ってもらう

「学外特設キャンパスでの学び～地域連携と教育効果～学生活動報告」



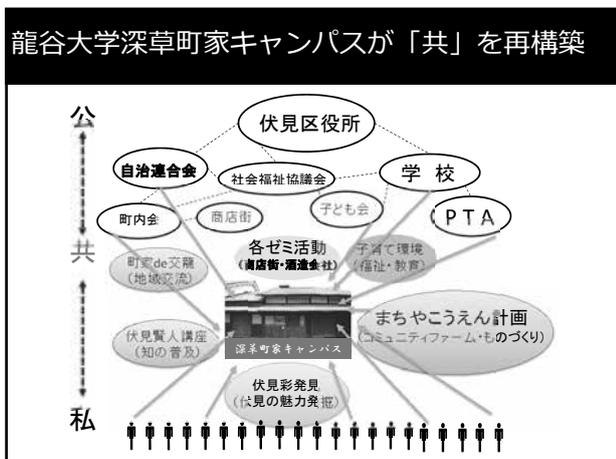
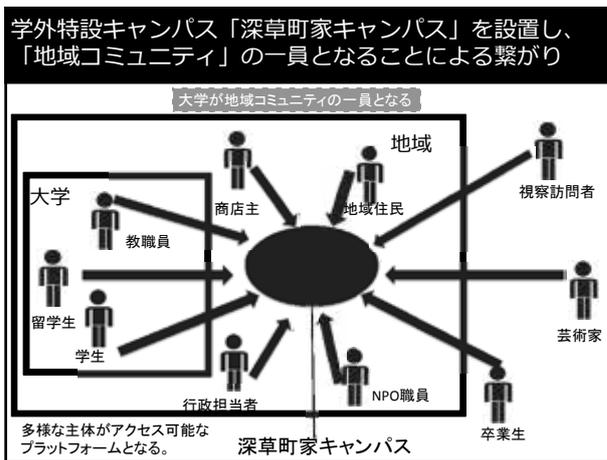
京まちや七彩コミュニティとは

龍谷大学の地域連携拠点である「深草町家キャンパス」に学生スタッフを募り、企画委員会として組織化した団体。現在は、地域住民の交流・参画を通して、共に学び合い・育て合いながら、地域の「居場所づくり」や「魅力再発見・発信」、「勉強会」等を担っている。

<メンバー構成>
1年次生8名、2年次生6名、3年次生3名、4年次生3名
合計 20名

活動理念(羅針盤)

- ビジョン
"みんなの"を考えて、行動する人々の育成と地域の実現
(地域公共人材の育成による持続可能な地域実現)
- ミッション
深草町家キャンパス事業を通じ、公共的な役割の担い手として成長し、同時に未来の世の中のことも視野に入れた暮らし方を体現することにより、"みんなの"を考える地域社会を実現する。
- 行動指針
私たちは、"みんなの"を考え、行動する人々の可能性を追求しています。私たちが学び、成長しながらアクションすることで、あらゆるものが変化すると信じています。そして、周囲の人々も変化することを信じ、諦めずに活動し続けます。



居場所づくり事業

自治会・町内会組織などの既存の地縁組織では、包摂することが難しい子育て世代を対象として親子と学生で居場所づくり事業を実施している。

交流や共同企画のなかで、「子ども達にとって暮らしよい地域」について考え、行動する公共の担い手を創出する狙いがある。

「(1)主に触れる機会の創出と食育をテーマとした「コミュニティガーデン」
 「(2)モノ創る楽しさやモノを大切にすることを育む「モノづくり教室」



2つのテーマで深草町家キャンパスに自然発生的に人が集う居場所づくりを推進し、「まちやこうえん計画」と称して取り組んでいる。

まちやこうえん計画 年間スケジュール

- 第0回こうえんミーティング「春のイチゴプランター大作戦！」(3/28開催)
- 第1回こうえんミーティング「夏野菜・種植まき」(4/25開催)
- 第2回こうえんミーティング「イチゴジャムづくり～春の収穫祭～」(5/23開催)
- 第3回こうえんミーティング「ずんだ餅づくり～夏の収穫祭～」(7/25開催)
- 第4回こうえんミーティング「流しそうめん大会」(8/28開催)
- 第5回こうえんミーティング「秋冬野菜の種まき」(9/26開催)
- 第6回こうえんミーティング「サツマイモご飯づくり～秋の収穫祭～」(10/24開催)
- 最終回こうえんミーティング「畑から食卓へ～素材の達人～」(11/28開催)
- 第2回町家子どもクッキング <弁当塾コラボイベント> (12/12開催)
- 立春の節分祭「豆まきオニ退治」(2/13開催)
- 第3回町家子どもクッキング <弁当塾コラボイベント> (3/12開催予定)

モノづくり教室 スケジュール

- 「本棚づくり教室～廃材を使って工作教室～」(7/11開催)
- 「流しそうめん台づくり教室～深草の特産物で工作～」(8/20～8/22開催)
- 「染物教室～敬老の日のプレゼントづくり～」(9/19開催)
- 「深草うちわづくり教室～地場産業の継承～」(11/7開催)
- 「行灯づくり教室～京町家と京都の灯り～」(1/16開催)
- 「<1年生企画> タイルアート教室」(3/5開催)



活動紹介2 町家<自主ゼミ活動>

活動を通した学び・経験・成長

- 大学だけではなく地域という共同体の中にいるということを実感した。
(1年次生 男性)
- 活動を通して目標ができ、学生生活に主体的な意欲が出てきた。
(1年次生 女性)
- 町家という憧れの環境の中で活動できることがそもそも貴重。
(1年次生 女性)
- 異なる肩書を持つ人や他世代と出会うことにより、各々に違った見方、捉え方、価値観があることに気付けた。
(1年次生 男性)
- 横の繋がりだけでなく縦の繋がりやナナメの繋がり生まれた。
(2年次生 男性)
- 「考えている。理解している。」だけでなく、行動が伴うようになった。
(2年次生 男性)

活動を通した学び・経験・成長

- 現代文明の素晴らしさに気付けたが、それらにより楽をする事で減るコミュニケーションや人と人がつながる場が減っていることに気付いた。
(4年次生 男性)
- 現場を担うことで、現象を取り巻く背景などを考えて分析する機会が多く、何故必要なのか、活動するのが備わって行動できるようになった。
(2年次生 女性)
- 年数を重ねるごとに後輩のモチベーションの維持・向上やチームビルディングについて、人材育成の視点をもつようになった。
(3年次生 女性)
- 1年次は先輩の背中を見て、2年次はプロジェクトを立ち上げて、3年次からはプレイヤー+マネージャーとして全体の構想を描くようになった。
(3年次生 女性)

表2 大学による町家利活用の事例

名称	建設時期	開設時期	場所	運営主体	活動内容
ならまちセミナーハウス (奈良女子大学)	明治中期	2005年～	奈良市鹿沙門町(大学から約1.5km)	現代伊推進室→10年社会連携センター	授業・演習、イベント、研究会等
京町家キャンパス江洲館 (同志社大学)	昭和初期	2006年～	京都市上京区(今出川キャンパスから約1.5km)	総合政策科学研究科ソーシャルイノベーションコース	授業、研究会、イベント、学外社会実験施設としての活用
龍龍 (龍谷大学)	明治中期	2007年～	大津市京町(大学蒲田キャンパスから約7km)	社会学部大津えんばわねっと	講義、演習、イベントの開催、地域行事への参加他
でまぢ家 (同志社大学)	不明	2008～2011年	京都市上京区(大学今出川キャンパスから約500m)	学生支援機構学生支援センター今出川校地学生支援課	町家サークル、井戸端会議、公開講座、地域行事、季節行事等
京町家キャンパス新柳屋 (京都学園大学)	明治中期	2008年～	京都市中京区(大学から約30km)	5学部の教員による運営委員会	人間文化学部の授業、公開講座、地域行事への参加等
京町家運橋キャンパスにぎ (京都工業繊維大学)	明治後期	2010～2013年	京都市中京区(京都工業繊維大学から約50m)	京都工業繊維大学	人材育成プログラムの活動拠点として、授業や実習等で活用、成果物の展示等
深草町家キャンパス (龍谷大学)	江戸後期	2013年～	京都市伏見区深草(大学深草キャンパスから約1km)	NPO法人深草・龍谷町家コミュニティ	授業、サークル、研究会、イベント等

表3 大学による町家利活用の比較

	でまぢ家	新柳屋	深草町家キャンパス
開設	2008年～2012年3月	2008年4月～	2013年4月～
主な財源	文部科学省事業	大学	大学
管理・運営	学生支援課事務員(嘱託職員2名+アシスタント1名)	総務課・研究連携支援センター・教育修学支援センター・京町家キャンパス運営委員会(教員)事務局(嘱託職員1名+学生アルバイト)	深草町家キャンパス管理運営委員会・R・E・C(10人ボランティア)・管理・運営の一部をNPOに委託事務局(職員2名+アルバイト)
事業内容	町家サークル、井戸端会議、季節のイベント、特別講座、地域行事(いずれも、学生と地域対象)	講義(学生対象)、市民講座(主に地域対象)	学生・教員と地域住民の交流関係(学生、地域)教育・研究関係(学生)課外活動・学生支援関連(学生、地域)
学生スタッフ	約30名程度、イベント毎に随時スタッフ	毎週土曜日は専属スタッフ、イベント毎に随時スタッフ	約15名
地域への開放	各事業やイベントに地域の方が参加するほか、地域の会合等にも利用	授業や教員による利用が中心	各事業やイベントに地域から参加
工夫・特色など	契約職員が学生と地域を結びコーディネート役を担う学生や地域の子どもの居場所として常時賑わう	日本の伝統・文化を学ぶ教材として町家を利用、維持管理のためのマナーを徹底	大学・地域で構成するNPOによる管理・運営、地域活性化、地域の課題解決を目指す

京都市伏見区深草地域の歴史

- 京都盆地の中でもいち早く水稲耕作が始まる(深草弥生遺跡)
- 日本書紀に「深草」の地名が記録
- 奈良時代 山城国風土記(秦氏と稲荷大社)
- 深草、桃山丘陵一体の粘土を利用した土器、瓦、伏見人形
- 参勤交代、観光等で栄えた伏見街道
- 軍隊のまちから学生のまち

参考：深草を語る(2013) 深草を語る会 9





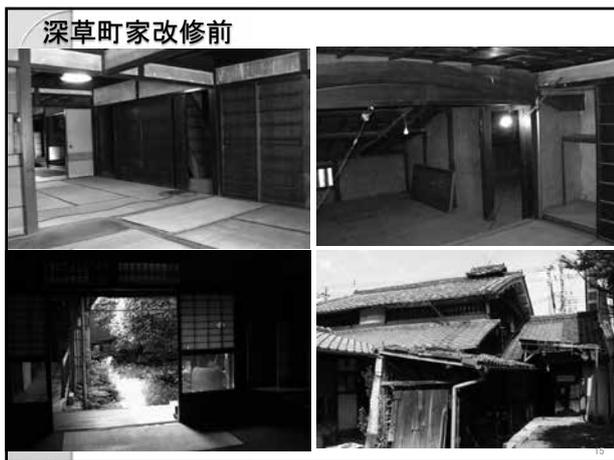
深草町家の利活用の検討経緯

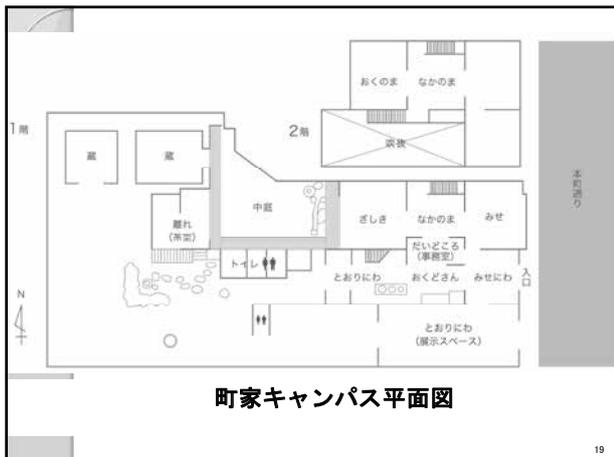
2010年度
所有者が京都市景観・まちづくりセンター、京都市伏見区深草支所などに相談し、京都府不動産コンサルティング協会も交えて活用方法の検討。

2011年度
龍谷大学も加わり、「『深草町家』利活用研究会」において利活用の方向性検討。所有者が改修し、龍大が借り受けることが決定。

2012年度
景観重要建造物の指定と、「京都市歴史的建築物の保存及び活用に関する条例」による建築基準法の適用除外規定を活用した第一号として保存建築物の登録。

14





NPO法人 深草・龍谷町家コミュニティ

- 「深草町家キャンパス」の運営・管理、地域情報の集約や地域と学生の協働による地域活性化事業を推進するため、龍谷大学の教職員及び地域住民（砂川学区自治連合会会長、深草学区自治連合会会長、深草商店街振興組合代表理事、京都ふれあい工房施設長）の13名を構成員とする「NPO法人深草・龍谷町家コミュニティ」を2013年4月に設立
- 各学部の学生有志15名で学生企画委員会「京まちや七彩コミュニティ」を組織し、町家キャンパスにおける事業の一部を企画・運営している。

施設概要

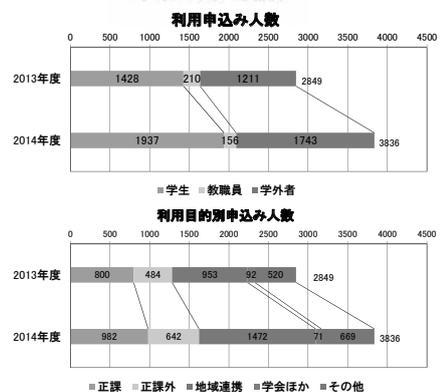
規模	木造2階建て 敷地面積（約519.2㎡）
開館日	火曜日～土曜日 日・月曜日・祝日は休館日
開館時間	11:00～20:45
用途	展覧会・交流スペース、課外活動施設、 NPO法人事務所等
使用対象者	1. 龍谷大学学生、大学院生 2. 龍谷大学教職員 3. 地域住民又は卒業生など学長が認めたもの

1. 深草町家キャンパス運営業務

- 龍谷大学学生、教職員や地域住民によるまちづくりの推進及び地域経済の活性化並びに社会教育の推進を図る活動の支援
- 龍谷大学が主催する行事、授業又は課外活動の支援
- 龍谷大学教職員が所属し、参加する学会・研究会開催の支援
- 伝統的建築物の保全と利活用を図る活動



利用実績



2. 地域連携事業

各種講座の開催

伏見区内の様々な課題に取り組むNPOや大学、地域の方々に講師として来ていただいたり、町家や京都の歴史・文化をテーマにした連続講座を開催し、参加していただいた方と一緒に車座になって意見交換などを行う場の開催。

- ・町家de 交龍（H25年度京都市学まちコラボ事業）
- ・伏見賢人講座（H25年度伏見区民活動支援事業）

25



町家de 交龍 京文化から学ぶこと～食・おぼんざい
町家の日々の手入れと暮らし方
着物で味わう京の伝統 など計5回開催、計約100名参加

伏見賢人講座 認定こども園ってなに？～認可外保育園10年間の歩みと喜び
大学と協働して行う商店街活性化策
高齢者でも気軽にパソコンが出来る～花パソのチャレンジ
など計7回開催、計約100名参加

26

町家de 交龍（地域交流イベント）の開催

町家という空間を活用して、地域の方にも気軽に参加していただけるイベントを開催することで、地域間、世代間交流を促進し、情報共有や意見交換による地域課題の発見や活性化に向けた連携体制の構築を目指す。

- ・「夕涼みde 交龍」（8月頃）
- ・「御月見de 交龍」（10月頃）
- ・「餅つきde 交龍」（1月頃）



（H26年度、H27年度伏見区民活動支援事業採択）

27

地域イベントとの連携

地蔵盆や「ふかくさ100円商店街」などの地域イベント時に町家キャンパス内で、子どもを対象としたイベントを実施。

- ・まちやみゆ～じあむプロジェクト
（H25年度京都市学まちコラボ事業）



2013年8月24日	地域の地蔵盆時に開催	来客者数	約40名
2013年11月23日	ふかくさ100円商店街	来客者数	約140名
2014年11月24日	ふかくさ100円商店街	来客者数	約60名

28

3. 学生活性化事業

たがやせ、キャンパス@深草町家

京まちや七彩コミュニティの学生が主体となり、町家キャンパスの裏庭を農地として整備し、地域の方々と共に、農園作業を展開することで、「食・農」について学びながら、地域交流のプラットフォームとする。

（H26年度京都市学まちコラボ事業採択）



29

まちやこうえん計画

町家の裏庭を地域に開かれた公園にし、農や食をテーマに、地域の居場所、フューチャーセンター、親子×学生のコミュニティの創出をめざす。

（H26年度龍谷チャレンジプロジェクト採択、H27年度龍谷採択）



親子ではたけの時間、プランター作戦、子どもクワガ、モ/作り教室
まちやこうえん計画の活動の様子

30

伏見情報集積・発信Webサイト事業

七彩コミュニティのメンバーが、地域団体や地元企業らと連携し、伏見地域の観光用ホームページの作成に携わり、伏見区内の歴史や文化を情報発信するとともに、観光の活性化につなげる。

連携団体：NPO法人伏見観光協会、伏見日本酒組合、
大手筋商店街、竜馬通り商店街、藤森神社、
京都教育大学、清和荘など

地域PRブログ「伏見彩発見」運営
<http://fushimikanko.tumblr.com/>

31

4. 情報発信事業

- ・広報活動として、NPO法人のホームページを作成するとともに、ソーシャルメディアを活用し、イベントや講座の開催告知、京まちや七彩コミュニティの日々の活動などの情報をタイムリーに発信している。

NPO法人深草・龍谷町家コミュニティウェブサイト

<http://f-machiya.jimdo.com/>



32

大学カリキュラムとの関わり

- ・2016年度～龍谷大学政策学部「地域公共人材特別講座（伏見PBL入門）」の授業運営受託

2014～2015年度、龍谷大学政策学部「政策実践・探究演習」の中で取り組んできた、「伏見ふれあいプラザプロジェクト」について、2016年度からNPO法人深草・龍谷町家コミュニティが連携し、授業運営に関わる。

町家キャンパスにおける意義や期待される効果

- ・主に1、2年生を対象とした地域入門科目の展開・運営により、
町家キャンパスの学内外への周知
- ・NPO法人深草・龍谷町家コミュニティの持つ人的資源、地域ネットワークの活用
- ・全学部開放科目により、学部を横断した授業の展開

33

大学による町家活用の効果と課題

(一般論として)

<効果>

- ・学びの場の創出
- ・賑わい、多世代間交流の場の創出
- ・日本文化、伝統の継承

<課題>

- ・継続的な利活用（財源とコスト）
- ・管理運営体制
- ・貸主、地域との関係構築

34

NPO法人による 深草町家キャンパス活用の効果と課題

<効果>

- ・学内外で、町家キャンパスについての認知は広まりつつあり、利用頻度は高まっている。
- ・町家キャンパスを訪れる学生、教職員や地域の方々、公共機関、教育機関とのネットワーク構築に寄与している。
- ・町家キャンパスを拠点として活動する学生の、企画力、コミュニケーション力、地域における課題解決力が向上している。
- ・町家という空間を活用し、京都の伝統、文化に触れ、継承について考える場を創出している。

35

<課題>

- ・龍谷大学の全学的な深草地域の活動拠点とはなりえていない。
- ・地域の方々にとって、町家キャンパスがまだまだ敷居の高い存在。
- ・貸館運営をするだけでなく、地域の様々な方、団体とのネットワーキング、地域の資源発掘や課題解決のコーディネート役が果たせるような組織を目指す必要性。

36

町家キャンパスへのもう一つの思い

- 町家である必要性とは？
- 大学が町家を利活用することの意義とは？
- 伝統と開放性
- 費用対効果

37

長浜バイオ大学における町家キャンパスの活用の現状

長浜バイオ大学 バイオサイエンス学部 教授 松島 三兒

本学の町家キャンパスは、長浜の観光スポット黒壁スクエアに隣接した場所にあり、長浜駅からも至近である。借りている江戸時代後期の町家は、土間が内と外をつなぐ役目をしており、学生が地域の人たちと交流するのに適した造りとなっている。

そもそも町家を借りようと思ったきっかけは、学生が長浜の中心市街地で活動する拠点を作りたいと考えたことである。本学は、長浜駅からひとつ南の田村駅前であり、学生たちの多くは滋賀県南部や京都、岐阜等から通っているため、長浜の中心市街地を訪れる機会が少なく、市民との交流もほとんどなかった。そこで、長浜のまちづくりをテーマとした PBL 科目「長浜魅力発見発信プロジェクト（現 長浜魅力づくりプロジェクト）」を開講し、学生が中心市街地に出向く機会を設けたが、授業が終われば学生の足はまた中心市街地から遠のいてしまう。授業がない期間でも恒常的に学生たちが中心市街地に出かけていき市民と交流する仕組みを作れないかと考えて得た結論が、町家を借りることであった。

こうして 2012 年 4 月に町家キャンパスがオープンした。当初は 20 名程度の学生が週に 1 回集まり、町家の活用ルールを策定するとともに、市民とも意見交換して活動の方向性を模索してきた。最初は地域の祭りやイベントへの参加が中心であったが、「長浜魅力発見発信プロジェクト」を履修した学生たちが加わると、活動も地域の小学生を対象にした科学者体験教室など自主的な内容のものが次第に増えていった。

町家に集まるのは基本的に何かをしたいと考えている学生たちであり、町家ででの話し合いは次第にふ化器としての役割を結果として果たしていくことになった。2012 年 10 月には合成生物学の世界大会に挑戦することを夢見ていた学生が中心となって iGEM Biwako Nagahama を立ち上げ、同年 11 月には市民を対象に科学の楽しさを伝えていきたいと考えた学生たちが Entrance to Science を立ち上げた。学生の活動が活発化すると、学生との連携を求める動きも出るようになり、2014 年春には地域の米農家、酒蔵、物産店が学生たちと連携して長浜の地酒を造る「長浜人の地の酒プロジェクト」がスタートした。また、地元のインターネット放送局の活動に参加し、地域からの発信にも関わるなど活動は拡大している。

町家で学生たちが活動を始めて 3 年が経過し、町家キャンパスの存在もかなり知られるようになってきた。今後は、学生たちが町家を自分たちのホームグラウンドとして、自分たちの意志で地域の人たちにも開放し、地域との結びつきをより強めていくことを期待したい。

最後に今回の FD フォーラムで発表の機会を与えてくださった京都学園大学の山本淳子先生に深く感謝申し上げたい。

長浜バイオ大学における 町家キャンパスの活用の現状

2016年3月6日
大学コンソーシアム京都
FDフォーラム 第13分科会

長浜バイオ大学 松島三兒

1

目次

1. 町家キャンパスの紹介
2. 町家の利活用に至るきっかけ
3. 町家キャンパス活用の経過と現状
 - 3-1. PBL型授業をきっかけに自主的な活動継続へ
 - 3-2. 1年次から地域活動への関心を喚起
 - 3-3. 自主活動とPBL型授業のパッケージ化
 - 3-4. 広がる町家キャンパスでの活動
4. 町家キャンパスへの想い

2

長浜バイオ大学

2003年4月 開学
長浜市、経済界が強かに誘致

滋賀県長浜市田村町1266

バイオサイエンス学部
バイオサイエンス学科
アニマルバイオサイエンス学科
コンピュータバイオサイエンス学科

学年定員 238名
在籍者 1,120名
男女比 73 : 27



3

1. 町家キャンパスの紹介

4



5



6

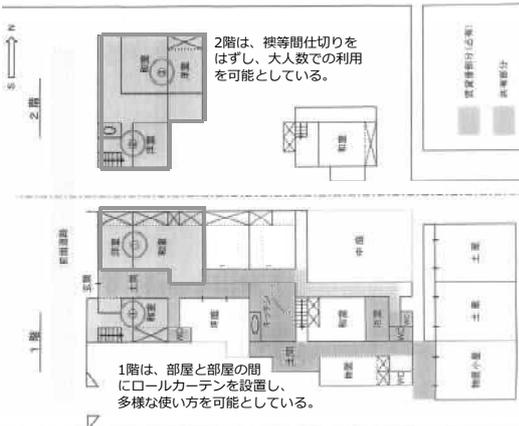
江戸時代後期の町家



7



8



9



10



11

2. 町家の利活用に至るきっかけ

12

松島自己紹介

- 2007年3月 JT早期退職
- 2007年4月 長浜バイオ大学転職
- 2008年4月 就職部長
- 2009年4月 キャリア教育開始
- 2010年4月 長浜まちづくり魅力発見発信プロジェクト開始
(現・長浜魅力づくりプロジェクト)
- 2012年5月 町家会議スタート

13

長浜まちづくり魅力発見発信プロジェクト開始

本学は長浜駅からひとつ南の田村駅に位置している。



2009年当時、学生の多くは滋賀県南部や京都府、岐阜県等から通っているため、長浜の中心市街地を訪れる機会は少なく、市民との交流もほとんどない。



名実ともに地域に開かれた大学としていきたい。

+

長浜は民間の活力が非常に高い。
将来の産業を担う人材の育成・指導に地元経済界として幅広くかかわってほしい。

14

2010年度 (11名)

課題候補は3つ

- 1 大手門通りの空き地の開発
- 2 まちづくりの街が入居する建物の開発
- 3 平和広場の再開発

トータル的な見直しをすれば、個々の物件の採算を考へる必要はない。人の気持ちにピタッとハマるものが求められる。

また行きたい、住みたいと思ってもらうために、建物がどうなるか、採算を考へる必要はない。

商店街の集会所が入居する建物が空いている。採算の採算も考へて、どんな再開発案とするか？

そのまま、中は在籍者だけで済ませるのではなく、積極的に活用する方が望ましい。また、中には在籍者だけでなく、外部からも活用してほしい。

15

最初はどんなふうになるかと思ったが、中間発表で印象が変わった。期待が持てる。先日もみなさんが街でインタビューしているのを見たが、こういうことの積み重ねがきちんとした中間発表につながったと思う。(長浜まちづくり株式会社担当者のコメント)

グループ作業中の参加者

まちづくり課題の現場を観察する参加者

中間発表

16

街なかでの発表会を企画・実施 (2011年2月)

長浜商工会議所との連携をより密にするため、共催に近い形で魅力発見発信プロジェクト発表会を開催



17

2011年度 (6名)

博物館通り商店街とのコラボ
東北復興支援イベント“東北元気市場”のなかでのイベントとして、石けん作り講座を開催

香りが溢る東北へのメッセージ

復興願い香り付け

18

ひとつの疑問

「長浜まちづくり魅力発見発信プロジェクト」の運営には、まちづくり会社や商店街など多くの人が熱意をもってかかわっており、本学学生が街なかで活動することへの期待の大きさがうかがえる。

しかし、この授業は後期のみであり、授業が終わればまた、学生の足は中心市街地から遠のいてしまう。結果として、長浜の人々を授業の運営のためだけに利用したような形になってしまうのではないか。

授業がない期間でも学生たちが恒常的に中心市街地に出かけていき、市民と交流する仕組みを作れないだろうか。

19

3. 町家キャンパス活用の経過と現状

20

町家会議のスタート

長浜まちづくり(株)の事務所だった町家を借り受け、学生が継続的に使用できる拠点とした。

21

20名程度の学生が、週1回町屋に集まり、市民と意見交換しつつ、活動の方向性を模索してきた。



22

町家プロジェクトとしてさまざまな地域活動に参加



2012年6月
まちなか本陣夏の陣



2012年7月
ゆかたまつり



2012年7月
わーくワーク北小タウン



2013年4月
曳山祭り
(写真は7月のご苦労さん会)



2013年7月
ゆかたまつり



2013年7月
わーくワーク北小タウン

23

3-1. PBL型授業をきっかけに自主的な活動継続へ

24

PBL型授業-町家を拠点とした自主活動の流れ

「長浜まちづくり魅力発見発信プロジェクト」を「長浜魅力づくりプロジェクト」とし、より地域を主役に据えた、主体的に関わるPBL型授業に



中心市街地に地域の人を呼び込めるような継続性のあるイベント作り
特定の当事者との閉じた関係のなかで終わらないプロジェクトを志向



逃げられない状況を作ることで本気度を担保
一体感を醸成

25

長浜魅力づくりプロジェクト

2012年度（7名） 湖北らしさを追求したランチメニューの“カブかぶランチ”



26

2013年度（9名） 町家を使ったつながりの場づくり“フララの家”



27

一体感醸成が自主的な活動継続を生む

本気で取り組むことで培われた一体感、信頼感が授業終了後の自主的な活動継続につながる

2011年度参加者

- 2012年7月 わーくワーク北小タウン（長浜北小）
- 2013年11月 滋賀県ものづくりフェア2013
- 2014年3月 エコでお絵かき キャップでアート！

2012年度参加者

- 町家プロジェクト発の自主活動Entrance to Science及びiGEM Nagahamaの活動に参加

28

2013年度参加者

- 2014年3月 エコでお絵かき キャップでアート！
- 2014年5月 土曜学び座（長浜公民館）
- 2014年7月 わーくワーク北小タウン
- 2014年10月 アート・イン・ナガハマ

29

自主活動の立上げ-ふ化器としての町家

【iGEM Biwako Nagahama】

合成生物学のiGEM世界大会に挑戦するために、2012年10月に開始したプロジェクト

2013年10月、香港でのアジア大会に出場、銅賞を受賞



30

【Entrance to Science】

中学生以上の地域の方対象に授業形式で身近な科学の楽しさを伝えて、地域交流を深めよう！という目的をもって2012年11月に活動を開始したグループ

町家を使って、2~3ヶ月ペースで講座を開催



31

3-2. 1年次から地域活動への関心を喚起

32

フレッシュャーズキャンプでの町家見学

フレッシュャーズキャンプの初日に上級生が町家プロジェクトの紹介をするるとともに、2日目の市内見学時に町家を案内し、地域活動に関心をもってもらうよう仕向けている。



33

長浜青年会議所の活動への参加

地域活動への関心を高めるため、長浜青年会議所ひとりづくり委員会による子どもたちの自立を引き出す活動に1年次から参加する仕組みを作っている。



2013年7月
輝らきらジョイントミーティング



34

3-3. 自主活動とPBL型授業のパッケージ化

35

自主活動とPBL型授業のパッケージ

長浜人の地の酒プロジェクト

2014年度（5名）、2015年度（19名）



36

長浜魅力づくりプロジェクト

2014年度（14名） 参加型脱出ゲーム
「現代の長浜から脱出せよ」
（5名） 「純米吟醸 長濱」
プロモーションビデオ作成

参加型脱出ゲーム



長浜人の地の酒プロジェクト



37

2015年度（34名） 呑め！解け！遊べ！
地の酒フェスタ+脱出ゲーム in 長浜



38

PBLの教育効果

地域との関係性の深化

- 授業後も地域活動に継続的に参加
- まちの人に個人名で読んでもらえる人間関係の構築

上級生による下級生への自発的支援の動き

- 議論が煮詰まったときのファシリテーション
- まちの人とのネットワークの積極的継承

就職活動へのポジティブな影響

- 2011年度受講者6名中就職希望者5名：全員が7月までに内定
- 2012年度受講者7名中就職希望者6名：全員が8月までに内定

39

3-4. 広がる町家キャンパスでの活動

40

STUDIOこほく

町家プロジェクトメンバーが、地元インターネット放送局
「STUDIOこほく」の学生スタッフとして放送に参加



2016年1月13日放送 ヤングナイト Vol.5&長浜チャンネル

41

サイエンスカフェ

複数の科学実験サークルが共同で、市民向けのカフェ付き
イベントを開催



42

地域の人たちと触れ合う活動

クリスマスリースづくり



七夕

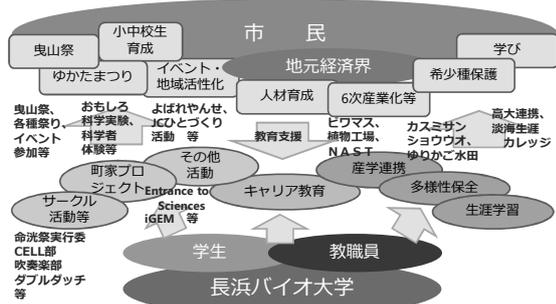


43

4. 町家キャンパスへの想い

44

大学と地域との関わり



45

町家という存在

町家キャンパスは、大学が地域に開かれていることの象徴である。

本学では町家キャンパスを、地元インターネット放送局のスタジオとしても開放するなど、地域の人が入りやすい環境づくりを行ってきた。

3年目にしてようやく町家キャンパスは、地域の人たちにかなり知られた存在になってきた。

一方、学生にとっては、町家キャンパスは地域に出ていくための橋頭堡のような存在である。

46

学生が町家を自分たちのホームグラウンドとして、自分たちの意志で地域の人たちにも開放していくことが、地域との結びつきをより強めることにつながる。

そのため、町家をどう使うかについてのルール作りは基本的に学生に委ねてきた。

学生にはぜひ地域の人たちと積極的に交流し、地域の人に「学生さん」ではなく名前でもらえる人になってほしい。町家はその可能性を高めてくれる存在である。

47

ご清聴ありがとうございました

48

学外特設キャンパスでの学び

～地域連携と教育効果～

NPO 法人京町家再生研究会 理事長 小島富佐江

□ 京町家とは

都市型の住宅 江戸時代後期～第二次世界大戦以前の木造住宅。

京都市内には約 46,000 軒が存在する。

伝統工法によって建てられた職住兼用の木造。

職業や住まい方、地域によって様々なデザイン、間取りなどがある。

京都学園大学の町家は中京区にあり、呉服の間屋として建てられた町家である。

表屋造りと呼ばれる典型的な商家の造りである。

□ 歴史的な建物を利用する

考え方を考える 建物にあわせるということ。

イタリアでは歴史的な建造物が大学のキャンパスとして使われているのが当たり前
の状況であった。まちなかを学生が行き来し、有名な建築物を教室として授業
を受けていることを目の当たりにした。日本では出来ないのだろうか。

日本の大学は利便性が大切なポイントであり、古い建物に対する理解は低い。

しかし、文化やその土地の風土を大学生が感じる事が出来る場を考えると、や
はりその土地に根ざした建造物の利用を考えることも大切ではないか。

不便なことも文化として考えてみる。学生にも考える機会を与え、それを理解し、
どのように受け入れる事が出来るのかを体験する場としてみてみてもいいのでは。

まちなかを歩いて見聞きしてみるものの効果

まちから学ぶこと

体で感じる。季節や光、風など四季折々の様子を感じることも大切。

機能的なことが一番良いことなのか？何かもっと工夫することがあるのでは。

□ 町家をキャンパスに

なぜ 町家をキャンパスに？

その土地の歴史的な建造物を利用することが、その土地の気候風土、文化を知る
ためのおおきな動機となる。

どんな使い方ができるの？

町家はフレキシブル。住む人、使う人に合わせる事の出来る建物である。

一定のルールを決めて、その中でどのような使い方が出来るか、みんなの知恵を
集めて、町家を活かして使う。

なにを学ぶの？

いろんなことが学べる。まちのこと、くらしのこと、土地の文化、商いなど、ま
た建物はフレキシブルであるので、どのような形にも使える。

不便ではないの？ 不便と考えるのか、それを文化と考えるのか。見方によって

考え方は変化することを理解する。

畳に座るの？

正座も日本の文化を培ってきたということを理解してほしい。

勉強に集中できるの？

集中力を磨くために、町家の暮らしをしってほしい。

□ 町家をキャンパスにするためには

改修の方法 規制 安全性などについては、まだまだ議論が必要である。

日本の住まい方を見直してみる。

何を伝えるのか、何を残そうとしているのか。取捨選択をするためにもその建物（町家や歴史的な建造物）をよく知ることが大切。

今のあたりまえ・昔のあたりまえ 全く逆になっていることもあるので、「あたりまえのこと」を整理し、再構築することが必要では。

ひと・もの・こと いろんなことがあり、それらに対応するためにもより以上の理解が大切になってくる。深い理解を進めるためにも環境を大切に整えたい。

□ 町家キャンパスを継承するために

なぜそこで学ぶことが大切なのか。

歴史の時間の中で様々なことが営まれてきたということを知ってもらいたい。

まちなかの暮らしから生活の文化を知り、ひいては京都というまちの成り立ちを学んでほしい。

京都の生活文化の担い手をつくる

様々な文明、文化が混ざり合っている今日、ゆっくりと自分達が生まれ育った環境を見直し、その土地に根ざした生活、暮らしを新たにつくりあげていくことが大切な目的であり、そのきっかけとして町家のことを学んでほしい。